

鹿苑の歴史と機能：奈良の鹿愛護会の活動史をふまえた整理

佛教大学宗教文化ミュージアム

学芸員 東城義則

(専門：民俗学)

*本資料は、2024年11月までの資料調査・研究成果にもとづき作成されている。

*写真等の資料は、所有者の許諾を得て掲載している。無断利用はお控えください。

*「春日神鹿保護会」「春日神社神鹿保護会」は、重要箇所を除き保護会と略します。「奈良の鹿愛護会」は、重要箇所を除き愛護会と略します。「春日大社境内地飛火野」は飛火野と略します。

1 鹿苑の歴史と機能

①鹿苑機能の変遷（1892年-2023年）

施設	機能 年	夜間 収容	職 員 待 機	(除 角 角きり実施)	一 時 収 容	犬 飼 育	飼 料 保 管	飼 料 生 産	事 務	埋 葬	診 療	(資 料 室 開 室)	資 料 展 示	焼 却	堆 肥 生 産	(子 鹿 公 開)	行 動 展 示	(鹿 苑 公 開)	形 態 展 示
A	1892年 明治25	○	×	×	×	×	?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
B	1903年 明治36	○	○	○	×	×	?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
C	1929年 昭和4	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	1947年 昭和22	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	1950年 昭和25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	1976年 昭和51	△	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×
	1983年 昭和58	△	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×
	1985年 昭和60	△	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×
	1998年 平成10	×	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	2011年 平成23	×	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
	2013年 平成25	×	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2023年 令和5	×	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

[東城 2021,2023]、新聞各紙、愛護会資料にもとづき作成

②機能と構造の説明

A(1)第一神鹿飼養場の機能：

1892（明治 25）年、第一神鹿飼養場は現東大寺南大門交差点南東（現トイレ付近）に建設された。シカを夜間収容して翌朝に開放する施設として建設された（夜間収容）。同場は、第二神鹿飼養場建設後も併用で使用された。

(2)第一神鹿飼養場の構造：

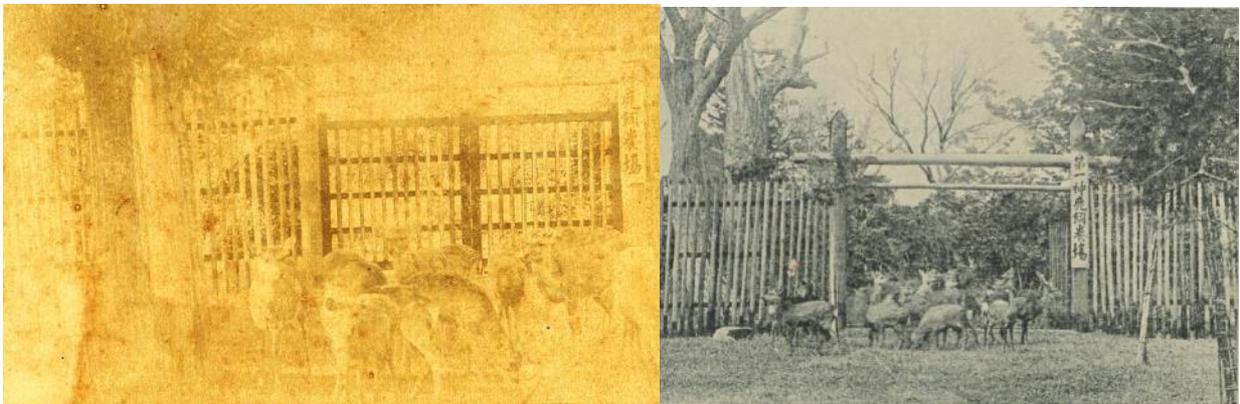
名 称：第一神鹿飼養場

所有者：春日神鹿保護会（土地：春日大社境内地）

面 積：不明

構 造：木造（木柵）、入口 1、空間 1

主機能：夜間収容 ⇒ 夕方に鹿寄せでシカを誘導、朝にシカを公園に開放する



左) 写真帖「大和国写真名所」より抜粋、明治後期発行、個人蔵

右) 「官幣春日大社」より抜粋、1895 年発行、個人蔵

B(1)第二神鹿飼養場の機能：

1903（明治 36）年、第二神鹿飼養場は現春日大社萬葉植物園の土地に建設された。周囲は石柵で囲われていた。同飼養場では、シカを夜間収容する空間に加え、詰所（職員待機）、仮設角きり場（除角）が設置された。これにより保護会の外勤職員が常駐して、詰所に宿泊しながらシカを世話する体制が整備された。同飼養場南には仮設の角きり場が設置され、奈良市民有志のちに保護会による除角（角きり、当時名称は神鹿角伐）がおこなわれた。

第二神鹿飼養場時代の末期（1910 年代末～1920 年代はじめ）には、奈良市街の宅地開発（道路開通）が進んだこともありシカの公園外への逸出が深刻化した[渡邊 2010]。保護会では、鹿せんべい製造業者との協働や職員による巡回強化により夜間収容を強化した。しかし、第一・第二神鹿飼養場の運用のみでは、夜間に多頭のシカを収容できなくなったため、三条町、油阪町等にシカを一時収容する仮柵が設置された[東城 2011]。

(2)第二神鹿飼養場の構造：

名 称：第二神鹿飼養場

所有者：春日神鹿保護会（土地：春日大社境内地）

面 積：不明（現萬葉植物園とほぼ同じか）

構 造：石造（石柵）、入口1、詰所1、空間1（仕切りあり）

主機能：一時収容 ⇒夕方に鹿寄せでシカを入れる、朝にシカを公園に開放する

職員待機 ⇒鹿守が詰所に待機・宿泊、公園巡回の拠点

除 角 ⇒仮設角きり場を併設（行事「神鹿角伐」を実施）



左)第二神鹿飼養場の入口(愛護会所蔵、1925年撮影)

中)第二神鹿飼養場の様子(愛護会所蔵、1925年撮影)

右)仮設角きり場における「神鹿角伐」を描いた絵葉書(個人蔵、1910年代)

C(1)鹿苑の機能：

1929(昭和4)年、飛火野東(旧馬場跡)に現鹿苑が建設されると、夜間収容に加え、傷病シカの隔離、人身被害対策を目的とした一時収容も始められた。円滑な夜間収容を実現するべく、「護鹿犬」の飼育・訓練もおこなわれた。

昭和戦中末期から戦後すぐにかけて、飼料不足のため苑内で飼料栽培がおこなわれた。愛護会への改称後、事務所の設置(事務)、鹿塚の移転(埋葬)がおこなわれた。1965(昭和40)年前後から、現奈良公園道路の交通量増加により積極的な夜間収容は中断された。1976(昭和51)年、事務所建て替えに伴い、診療および病理研究棟(診療)、資料室(資料展示)が設置された。1983(昭和58)年には、焼却場が設置され(焼却)、衛生に配慮した埋葬がおこなわれるようになった。鹿害裁判終結後、鹿苑と公園のシカの移動を制限するとともに(夜間収容の終了)、苑内に柵を増設して収容頭数の上限が図られた。

その後2010年代には、鹿苑は屋外展示場として利用されるようになった。具体的には、角きり場を活用して母仔間のコミュニケーションや仔の集団行動を展示する子鹿公開(行動展示)や、見学通路の設置を経てシカの形態や苑内群居を見学できる鹿苑公開(形態展示)が始められた。

(2)鹿苑の構造

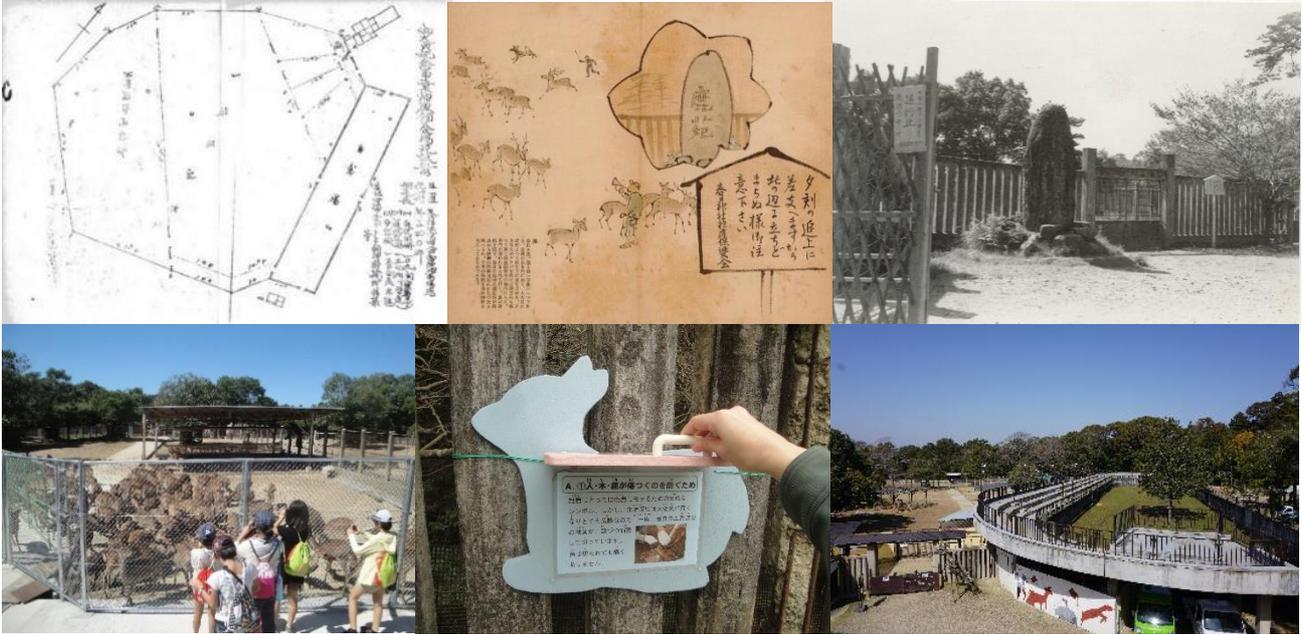
名 称：鹿苑

所有者：春日神鹿保護会→春日神社神鹿保護会→奈良の鹿愛護会→奈良県

(土地：春日大社境内地)

面積：約 4.1ha (改修前 最終面積)

構造：鉄筋コンクリート造、入口 1、詰所 1、飼料保管庫 1、大空間 2 (角きり場 1)
(のちに柵内仕切り・事務所・焼却炉・堆肥生産施設を増設、敷地拡張)



(上左) 鹿苑建設見取図 (1929 年ごろ作成、愛護会所蔵)

(上中) 『奈良勝地漫画』 (1935 年発行、個人蔵)：

夜間収容のため、シカを鹿寄せで追っている様子を紹介

(上右) 夜間収容のため、角きり場を開放している場面 (1957 年、愛護会撮影)

(下左) 鹿苑公開 (形態展示) の様子 (2013 年、愛護会撮影)

(下中) 鹿苑公開 (形態展示) に合わせて作成された壁面展示 (2014 年、愛護会撮影)

(下右) 鹿苑写真 (2018 年、愛護会撮影)

③その他特記事項

- ・ 1957 (昭和 32) 年、国の天然記念物指定にあわせて、鹿苑を博物館法による博物館相当施設 (現博物館指定施設) に登録申請 ※申請書類写のみ残存
- ・ 申請主体は愛護会 (学芸員、嘱託研究員の配置)

2 愛護会の歴史と業務 (鹿苑に関連する部分を中心に)

①春日神鹿保護会 前史

時期	神鹿保護の担い手	埋葬
江戸期	都市周縁の社会集団	(住まい近隣に埋葬か)
明治期 (-1890 年)	現春日大社境内地で働く人びと (自発・依頼)	春日大社境内地

明治期(1891年-)	春日神鹿保護会 職員	春日大社境内地
-------------	------------	---------

[水谷 2005；奈良の鹿愛護会（監修）2010] ほか。明治期については東城未発表

②春日神鹿保護会～奈良の鹿愛護会 組織変遷

西暦（和暦）	月	形態	名称
1891（明治 24）年	7	任意団体	春日神鹿保護会
1912（明治 45）年	4	奈良県知事認可団体	春日神鹿保護会
1934（昭和 9）年	3	財団法人	春日神社神鹿保護会
1947（昭和 22）年	4	財団法人	奈良の鹿愛護会
2013（平成 25）年	4	一般財団法人	奈良の鹿愛護会

[東城 2023：187]

③春日神鹿保護会の設立[東城 2023]

1891（明治 24）年 7 月、春日神鹿保護会が設立された。創設当初、同会の主要業務は、シカの夜間収容・巡回（公園外逸出防止・密猟予防・死骸処理）である。内勤は事務員 1 名のほか、春日神社（現春日大社）神職が兼担した。外勤は、鹿守（しかもり）と総称された現場労働者が勤めた。

第一神鹿飼養場の建設後、夜間収容(鹿寄せ)が開始された。第二神鹿飼養場の建設後、宿直、剖検(死因解明)、徐角(角きり)が始められた。

④春日神社神鹿保護会の設立

1934（昭和 9）年、保護会の法人化にともない、春日神社神鹿保護会が設立された。アジア・太平洋戦争期には、夜間食餌用の飼料不足、外勤職員の戦時徴用等により夜間収用が一時中断された。戦時末期から戦後すぐにかけて、鹿苑内一部は畑にされ飼料用の食料生産がおこなわれた。また鹿苑西側、西南側を整備して「芋畑」を開墾した。

⑤奈良の鹿愛護会への改称（昭和戦後）

1947（昭和 22）年、保護会は奈良の鹿愛護会へと名称変更した。1950（昭和 25）年ごろ鹿塚の鹿苑移転によるシカの埋葬が始まった。また 1940 年代後半から 1950 年代前半まで頭数増加を目的とした積極的救護がおこなわれた。1960 年代には護鹿犬飼育の中止、職員の専門化がおこなわれた。その一方で、人身事故増加のため時間外労働も増加した。

⑥奈良の鹿愛護会の現在（平成・令和）

平成時代以降、天然記念物「奈良のシカ」保護管理にかかわる業務（C 地区巡回と逸出シカの収容）や人身被害対策のため出動数増加が進む。2011 年（平成 23）以降、子鹿公開(行動展示)や鹿苑公開(形態展示)といった保護教育事業も開始された（保護教育課の設置）。

⑦診療体制

1920年代から診療棟（病理研究棟）完成まで、愛護会（保護会）では奈良県または奈良市所属の獣医師に剖検・死因調査を委託した。同棟完成後から2017（平成29）年度まで、愛護会は獣医師を嘱託契約で雇用してきた。2018（平成30）年度からは、愛護会は獣医師を常勤職員として雇用している。

診療は、基本的に獣医師による単独業務であった。2019（平成31）年1月より、組織内で獣医補助役（1名）を設置した。これ以降、獣医師と、獣医補助（労力を提供）による診療体制となる。同時期より、獣医学部学生の実習受け入れも開始された。2021（令和3）年からは一般から治療ボランティアを募集し、診療補助にあたっている（2024年11月時点で、治療ボランティアは鹿サポーターズクラブ会員のみ従事）。

3 愛護会活動について調査・研究結果より指摘可能なこと

①愛護会業務における「保護」の指す内容[東城 2021,2023]

- ・愛護会におけるシカの「保護」業務では、次のようにシカと接する。
- ★公園関係者・地域住民よりシカ（傷病・公園逸出・事故）について情報収集する。そして出動して、シカを誘導して公園内へと戻したり、保定して鹿苑へと収容したりする。死亡したシカは、回収して、死亡地点や死因を記録して埋葬する。
- ★原則、業務において個体識別をしない（シカに名前をつけない）。個体識別は、一時収用時や死因説明時におこなわれる。愛護会では、業務中は1頭のシカを群れのなかの1頭として扱う。そして収用に伴う記録作成時に、1頭のシカを天然記念物「奈良のシカ」の個体として扱う。

②鹿保護の文化的特徴と職員養成[藤本・吉岡 2017;東城 2021,2022,2023]

- ・神鹿保護・鹿保護・鹿愛護：愛護会職員と、奈良公園で働く人・奈良公園に出入りする人びとにより、協働で日常的にシカ（神鹿）を守る文化
 - ・経験（で知る、理解する）文化 ⇒ 愛護会による環境教育（普及啓発）の重要性
 - ※歴史的かつ協働で維持されてきた奈良特有の文化⇒世界的には少数文化
- ・愛護会の業務：経験による学習の重要性⇒事業課職員は10年で1人立ち
 - ・ABC地区の地理情報（通りや建物の記憶）、軽トラックによる迅速な移動
 - ・シカの生活・群れ行動の経験的な理解（cf.生態研究との一致 [立澤・藤田 2001]）
 - ・捕獲・麻酔注入・収容・鹿苑からの開放等、職務でシカと関わる技術の習得
- ★愛護会の経験知・技術：(i)シカの生息する奈良公園とその周辺の社会生活、(ii)歴史的な協働によって維持されてきたシカの保護文化を支えるもの

③調査・研究の重要性[東城 2023, 東城未発表]

- ・保護会・愛護会の調査・研究：重要業務 なぜシカは死亡したのか？…を検証
- ・死因説明にもとづき事件性を検討 ⇒ 犯人を捜索 [cf.渡邊 2001]
 - ・神鹿の時代（-1947年）：刑法（器物損壊罪）

- ・天然記念物「奈良のシカ」の時代（1947年-現在）：文化財保護法
- ・記録・調書・診療録の作成（職務現場における知見の共有）
- ★病理解剖、死因研究を優先した調査・研究（肺炎や肋膜炎、感染症の報告）

④積極的救護と診療[東城未発表]

- ・シカの救命を目的とする積極的な救護の検証
- ・1940年代後半-1950年代前半：夜間収容時の個体識別、積極治療、母仔シカの搜索
- ・頭数減少期のみ展開された活動、その後の継承なし（団体規模も影響）
 - ※診療棟（病理研究棟）の完成（→胃内容物の調査研究 [西谷 1975]）
- ・現在の診療体制…1940年代-1950年代前半に共通する積極的救護
- ★歴史的な文脈から考える救護：群れの生息状況、研究蓄積にもとづく取り組み

4 愛護会活動史から検討する鹿苑の機能

①愛護会活動の課題

A教育・研究機関との連携／教育資料の開発

- ・教育・研究機関として未承認であるため、他教育・研究機関との連携が進まない
 - ⇒教育・研究機関のもつ実務知識を共有できない（物品情報や疫学情報等）
 - ⇒業務データの属人化、閉鎖傾向となる調査・研究（所属職員の力量に依存）
- ・なかでも、教育資料（普及啓発用の実物資料）の開発は大きな課題
 - 例1）シカの生活、シカの身体組織や構造、人獣共通感染症、鹿苑、鹿の角きり、鹿寄せ、鹿苑、鹿垣、ぼったり（移動防止扉）、防護柵の解説シート作成
 - 例2）肝蛭やダニ等の標本資料作成
- ★これらは来苑者や修学旅行者、地域住民向けの教育資料であるとともに、観光客向け普及啓発資料としても有用（さまざまな用途が見込まれる）

B資料の保存環境

- ・人員増加・職務増加による事務所空間の過密化 → 資料保存場所の喪失
- ・資料保管環境の問題
 - ・骨格標本資料、胃内容物資料の保管と管理
 - ・江戸末期～昭和戦前期に記録された会務記録の劣化（酸性化）が進行
- ・数十年後には明治期～昭和戦前期の記録を喪失する恐れ（cf.鹿害裁判の資料）

C知識・技術の継承と研修

- ・愛護会：都市公園とその周辺でニホンジカと接する組織（比較できる団体なし）
- ・熟練職員の退職＝奈良のシカ保護を支える経験的な知識・技術の喪失
 - 知識：その年・その季節ごとのシカの行動、場・建物・人の様子
 - 技術：捕獲方法（例：夜間、1人でシカを捕獲する方法）、注射器の使用方法…

- ・職員養成、技術向上を兼ねた空間の確保

②愛護会活動をふまえ鹿苑に実装すべき機能

A多様な来苑者を想定した教育機能・研究機能

- ・鹿苑における各種事業を展示活動として位置づける（実務と教育・研究の両立）
 - ・天然記念物の公開展示（行動・形態）...子鹿公開・鹿苑公開・鹿寄せ
 - ・奈良に伝わる無形文化の公開展示...鹿の角きり
- ・神鹿保護、各種行事の歴史的ストーリーを伝える展示、シカの行動観察といった野外教育プログラムの提供（文化観光、生態観光とも直結）
- ・研修室の設置（講義やワークショップによる利用）、図書室の設置

B歴史資料・標本資料の保存機能、用具類の保管

- ・歴史資料（歴史的観光資料、映像資料を含む）の保存、胃内容物の保存
- ・カビ・防虫対策の実施、生体試料を保管する設備の設置、小規模収蔵庫の設置
- ・各種行事で使用する用具類の保管（展示）

Cバックヤード機能

- ・作業室の設置（教育・研究・データ整理用の作業室）
- ・原則一般公開しない空間の設定（技能研修や物品保管等で使用）

4 まとめ：持続可能なシカ保護のために

鹿苑＝シカ保護（群れ保全・環境教育・文化観光/生態観光）の拠点インフラ

現場実務と環境教育（観光）の両立する、資料保存機能をもつ博物館指定施設の構想

参考文献

- 立澤史郎・藤田和 2001「どうしてシカはここにいる？—市民調査を通してみた「奈良のシカ」保全上の課題—」『関西自然保護機構』23:127-140
- 東城義則 2011「市民による動物の所有一大正期奈良における愛鹿運動をめぐって—」『動物観研究』16:21-32
- 2015「都市公園とその周辺における野生動物群の行動管理—奈良公園における鹿寄せの成立—」『京都民俗』33:89-107
- 2021「都市公園とその周辺における職業集団による動物保護の実践—天然記念物「奈良のシカ」の保護活動を事例に—」『京都民俗』39:13-33
- 2022「日本における天然記念物保護の展望—「奈良のシカ」の保護活動を事例に—」『BIOSTORY』37:77-79
- 2023「労務・事務・意思決定からとらえる動物保護の活動：奈良公園とその周辺における「神鹿保護」の事例より」志村真幸編『動物たちの日本近代 ひとびとはその死と痛みにかに向きあってきたのか』ナカニシヤ出版 pp.181-204
- 奈良の鹿愛護会（監修）2010『奈良の鹿 鹿の国のはじめての本』京阪奈情報教育出版
- 藤本康之・吉岡豊 2017「シカを見守る—奈良の鹿愛護会の活動—」『生物学史研究』96:25-34
- 西谷康信 1975「奈良公園における鹿の胃内異物調査（特にビニールを主として）」財団法人春日顕彰会（編）『昭和 49 年度天然記念物「奈良のシカ」調査報告』財団法人春日顕彰会 pp.49-56
- 水谷友紀 2005「近世奈良町と興福寺—死鹿処理からみた—」『洛北史学』7:45-69
- 渡邊伸一 2001「保護獣による農業被害への対応—「奈良のシカ」の事例—」『環境社会学研究』7:129-144
- 2010「渡邊伸一—近代における奈良の鹿—「共存」への模索と困難（1868～1945）」奈良の鹿愛護会（監修）『奈良の鹿 鹿の国のはじめての本』京阪奈情報教育出版 pp.171-214